

## 地学選択者数の減少と魅力的な教科書

## The Decrease in the Number of Students who Choose Earth Science and Attractive Textbooks

# 有山 智雄[1]

# Tomoo Ariyama[1]

[1] 開成中学・高校

[1] Kaisei Junior and Senior High School

<http://www.kaiseigakuen.jp>

高等学校における地学選択者数の変化の例を紹介し、その原因について考察する。また、科目選択の意思決定の際に教科書が果たす役割について考察する。また、教科書作成のプロセスを紹介し、「魅力的な教科書」を作成することについて考察する。

筆者の勤務する高校（中高一貫のいわゆる進学校）では、平成7年度までは、高1では物理、化学、生物が必修で、高2から物理、化学、生物、地学から2科目選択するシステムであった。平成8年度からは高1で物理、化学、生物、地学から3科目選択するシステムに変更された。高校1年でも地学を選択できるシステムになったので、地学選択者が増加すると予測されたが、実際には地学選択者は減少することになってしまった。その大きな原因は進路志望（文系か理系か医学部系か）が決まらない段階（高校1年生になる前）で科目選択をさせることにありと考えられる。少数の例外を除いて、大学の受験科目の関係で、地学を選択できるのは「文系進学」を決めた者だけになってしまうからである。医学部が高校での生物履修を強く求めるようになったことも強く関連している。大学受験の科目ということを考えると、「物理、化学、生物は切ることができない。だから地学を選択したくても選択できない」という状況ができてしまっているわけである。平成元年度の指導要領の改訂で「理科の選択科目化」はより一層進行した。選択科目としては理科4教科の中で競争力の弱い地学にとっては、より厳しい状況となることが予想される。「理科基礎」、「理科総合A」、「理科総合B」の3科目から1科目が必修として課されるが、この中で「理科総合B」には地学の内容が含まれている。科目名は「地学」ではないが、「理科総合B」の中で地学を教えることを前向きに考えることも必要かもしれない。

生徒の立場で考えると、科目選択の意思決定は「受験科目」と切り離すことはできない。「教科内容の面白さ」や「教科書の魅力」だけではなかなか意思決定できないのが実情である。

教科書作成は「指導要領」に基づいてなされ、「検定」に合格することが絶対条件となる。そのためには「過不足なく、定められた事項に言及していること」が求められる。また、「他の社の教科書には載っているが、うちの社の教科書には載っていない」ということは、「他社との競争」ということを考えると避けなければならない。このような事情から、教科書は限られたページ数の中で、非常に多くのことに触れなければならない、ともすると「羅列的」な印象を与える記述になってしまう場合もある。「検定制度」という枠組みの中でいかに魅力的な部分をアピールしてゆくかが課題であろう。